

一年で最も過ごしやすいころに大型連休があるのはいいですね。でも大学で教えていたときに思いましたが、せっかく新学年の勉強が軌道に乗ったと思ったら連休にぶつかるのは、教える方としては嫌なタイミングでした。それより、6月の蒸し暑くなった頃に大型連休があれば、とも考えました。大学ではこの連休の後、学生たちの多くは入学した頃の新鮮な気持ちも消えて、勉強にも生活にもやる気を失う五月病というものにかかるのですが、来年の今頃、そうならないようにちゃんとした目標を持って大学に行くようにしてください。

さて前回、「なぜ人を殺してはいけないのか」と若者が問うて、それに対し大人が答えられなかったというエピソードを紹介して、人間の行いには善い行いと悪い行いがある、何が善で何が悪かは普通の人ならすぐ分かるが、なぜこの行いは善でこの行いは悪かという理由を説明するのは簡単ではない、またこのようなことを考える学問が倫理学だ、なんてことを話しました。人間の行いに善と悪があるという主張に反対する人は、私たちの回りにはいないと思います。ところが、広い世間には、この常識的な言い分を否定する人もいます。今日はそういう主張を紹介したいと思います。

【普通の道徳を否定する考え】

この代表者は、ニーチェ（1844~1900）という人です。彼はソクラテスから自分の時代に至るまで世間で常識と考えられていた道徳観念を全面的に否定します。彼は「わしゃ、不道徳者やで」と言って、道徳をののしることを好みました。彼が攻撃した道徳というのは、主にキリスト教の道徳とソクラテス以降のギリシアの道徳です。もし彼が儒教の教えを知っていたら、これものしっていたと思います。彼は、ソクラテスが「金銭や名誉を追い求めるのではなく、魂をよくすることを考えよ」とか、「不正をされて損する方が、自分が不正をするより」なんていうことは、楽しく生きて肉体を賛美しその力強さに陶醉するという本来人間が持っているエネルギーを枯らせてしまうことだ、と言います（これは大いに間違っていると思いますが・・・）。また、弱い人に親切にせよとか、へりくだることが大切だとか言うキリスト教の教えは、「奴隷の道徳」だとするのです。



この「奴隷の道徳」という考えは、実は昔の古代ギリシアに出現しています。昨年の授業のときに言いましたが覚えているでしょうか。プラトンの一つの対話編に、『ゴルギアス』というソフィストを扱ったものがあるのですが、その中でソクラテスが討論する相手のカリクレスというソフィストが次のように言っています。

「そもそも法を作った奴というのはな、世の大多数を占めている力のない弱い奴らなんや。せやから、そいつらが法を制定して、これはええことや、これは悪いことやなどと勝手に決めさらして、誉めたり咎めたりするのは、要するに、おのれの身の上を心配し、おのれの利益をはかろうという目的に他ならへんのや。つまりやな、あの弱虫どもは人間たちのなかでも力の優れた者や、自分の権利の優位を主張するだけの能力をもった者をおどかして、おのれの持ち分がそう言う優秀な者に侵されへんように、『欲張ることは醜いこっちゃ、不正なこっちゃ』と言い立て、『不正とはそのように他人よりもようさんものを持つとすることや』と説いたわけや。・・・せやから、世の大多数の人間よりようさん持つとすることは不正やし醜いことやと言われとって、またそういう行為を不正行為やと名付けとるわけやけど、わしが思うには、自然そのものは、逆のことを示しとる。つまりやな、優れた者は劣った奴よりも、ま

た有能な者は無能な奴よりも、多く持つことこそ正しいのや、と。・・・ともかく、明らかなのは、正義とはいつもそのようにして強い奴が弱い奴を支配し、強い奴は弱い奴よりも沢山持つという仕方で見るとのことや」

要するに、道徳は、弱い者が強い者からいじめたり、財産を奪われたりしないために、そうして自分の安全や利益を守るために作り出したものだと言うのです。本当にそうでしょうか。こういうことは、頭で想像して荒唐無稽な(「けったいな」を難しく言うところなる)理論を作り出していくのではなく、実際に何があったのかを過去の記録を読みながら調べていかなければ、本当のことはわかりません。想像力を使って、「きっとむかしはこうやった。ああやった」と言うなら、それは歴史ではなく、小説です。(ついでに言っておきますと、ホブスやルソーたちが言う「原始の自然状態」というのも、空想の産物で歴史的事実ではありません)。さて、歴史を見れば、「ハンムラビ法典」の例でも分かるように、法を制定したのは権力者たちでした。古代では力のない民衆が法を制定したことはありません。近代になって民主主義の社会になってからも、法の制定者は選挙で勝って議会で多数を占めた人々です。そしてその中には弱者を切り捨てる法律もあった。例えばナチスの安楽死を認める法律のように。

カリクレスが「自然そのものは、逆のことを示しとる」と言っていることに注目して下さい。彼の主張は、「人間の自然の状態は弱肉強食の状態だ」となります。でも「弱肉強食の状態」は動物に当てはまることではないでしょうか。ここで問題なのは、人間にとって「自然」とは何かという問題です。自然とは、法律も道徳もない状態で欲望のままに生活できる状態なのか、それとも法律や道徳などのルールに従って生きることなのか、ということなのです。

「自然」の反対が「人為的」です。人為的とは「人間によって作られた」という意味です。もし道徳が人為的なもので、本当の人間性をゆがめているならば、道徳とか礼儀とかは害になるから教えるべきことではない、となります。もしそれらを教えないなら、カリクレスの言うように、強いものの横暴を押さえる規範はなくなる。そうすると確かに強い人は何のはばかりもなく弱い者を押さえ込み、自分の欲望をたっぷりと満足させることが可能になります。でもそれは、もはや人間の生き方ではなく動物の生き方と言えるでしょう。ニーチェもカリクレスも、つまるところ人間は動物的に生きるのが幸せだと言っているとも考えられます。こういう人はそう珍しくありませんが、彼らは自分が何を言っているか十分に考えていないと思います。



アリストテレスは人間という「種」は動物という「類」に属しているが、他の動物と異なる点(種差)が三つあるとしました。それは「理性的」、「社会的」、「道徳的」という三点です。つまり、人間は道徳を持つが、動物は持たない、と言うのです。少々脱線ですが、定義とは「類」と「種差」を合わせて作る。そこでアリストテレスは人間とは何かと問うて、「理性的な動物」、「社会的な動物」、「道徳的な動物」と定義したのです。

だから、もし動物的な生き方をしたくなければ、道徳を知り守る必要があります。「善を行い悪を避けよ」という命令は、弱い人間が自分を守るために作ったものではなく、人間なら誰もが持っている観念とでもいうべきものでしょう。それに従って生きることが、より人間的な生き方であると言えるでしょう。言い換えれば、道徳とは「人の道」です。

でも、この道徳観念は皆が生まれつき持っているものなのでしょうか。それとも、教えられて身につけるものなのでしょうか。この点についても色んな意見があるので、次はそれを見てみましょう。